

2017年9月3日(日)朝10:10

主の聖霊降臨節第14、オリーブ会等

9月第1聖餐総員共同主日礼拝式説教

日本アライアンス庄原基督教会

説教題：**7つのラツパ；第7の金の鉢：**

大淫婦と獣の奥義

聖書：ヨハネの黙示録 17章6b～8節

＜口語訳＞

新約聖書402～403頁

ヨハネの黙示録 17章6b～8節

＜新共同訳＞

新約聖書471～472頁

ヨハネの黙示録 17章6b～8節

＜新改訳第3版＞

新約聖書495頁

ヨハネの黙示録17章6b～8節

＜塚本訳＞

新約聖書812頁

主題：主イエス様から賜った聖霊の導き

によって主の弟子たちは、主の名による
神の罪からの救いを宣べ伝えたように、
私たちも、福音を伝えたい。

序論；

- ◇ヨハネの黙示録は、1章1節、「イエス・キリストの黙示」とありますように、神の御子イエス・キリスト様が、天使を通して(1)、長老・使徒ヨハネに与えた「神の国到来の奥義」の黙示で、ローマ皇帝ドミティアヌス(81～96)時代に記録されたものと理解されています。
- ◇ヨハネ黙示録1章は、御子の再臨信仰と愛、2章～3章は、7つの教会への手紙、4～5章は、羔羊礼拝と大讃美、6～13章は、聖徒の戦い、天使と龍(悪魔・サタン)、獣との戦い、14章は、小羊への大讃美、神無視の人々への裁きと信仰者への忍耐の求め、15章は、金の怒りの鉢による神の裁き序曲、16章は、金の鉢の用意命令、腫物、血海、血水、太陽炎焼、獣の座の暗黒による裁き、ハルマゲドンでの龍(悪魔・サタン)、第1、第2の獣と主なる神との最終決戦、バビロンの滅亡預言で、1～6節aは、大淫婦・バビロンの神なき生活と地の権力者との結びつきです。
- ◇ヨハネの黙示録17章6b～8節も、大淫婦が乗る獣の奥義の天使による説き明しです。

本論；

◇本日、ヨハネ黙示録第17章6b～8節から主の使信に思い・心をとめます。

◆黙示録17章6b～8節；ヨハネは先ず、獣の奥義の天使による説き明しを聴きます。

◇17:6b～8；塚本訳◆第七金の鉢—異象の説明

「6b 彼女を見た時私は大なる驚きに打たれた。

7 すると天使が私に言うた、「何故驚くのか。私がこの女と、それを背負っている七つの頭と十の角のある獣との奥義をお前に話してやろう。——

8 お前が見た獣は以前にはいたが今はいない。しかし(直にまた)奈落(の底)から上って来るであろう。そして(時期が来ると再び永遠の)滅亡に(落ち)行くのである。そして地に住む者で、宇宙開闢の時からその名を生命の書に記されていない者は、その獣が以前にはいたが今ははず、再び来るのを見て驚くであろう。」と、ヨハネは、大バビロン・大淫婦と獣の奥義、先ず獣の奥義を説き明かすのを聴きました。

◇ 6b～7節 ;ヨハネが、滅びたはずの「**緋色と紫の衣を着て獣にのる大淫婦**」の姿に驚くのを見て(6b)、天使が、「**何故驚くのか。私がこの女と、それを背負っている七つの頭と十の角のある獣との奥義をお前に話してやろう**」と、語りかけてくれるのを耳にしました。

⇒ヨハネは、「**この女と、それを背負っている七つの頭と十の角のある獣との奥義**」を知りたいと願っていたのです。

◇ 8節 ;先ず、天使は、「**お前が見た獣は以前にはいたが今はいない**」、「**しかし(直にまた)奈落(の底)から上って来る**」、「**そして(時期^(とき)が来ると再び永遠の)滅亡に(落ち)行く**」と、獣の過去、現在、未来を語り、「**そして地に住む者で、宇宙開闢^(かいびやく)の時からその名を生命の書に記されていない者は、その獣が以前にはいたが今はいず、再び来るのを見て驚く**」と、「**その名を生命の書に記されていない者**」の驚きを予告しています。ヨハネの不安な思いを神は理解しておられます。

⇒「**獣の過去、現在、未来**」をOS師は、主イエス様と対比して、その**相異**を示します。

- ⇒「**獣**」は、**反キリスト**を象徴する**残虐皇帝ネロ**を想起させ、**ヨハネの黙示録13:3**で**獣**が頭の大打撃を受けて死にますが、生き返って来るのを**ヨハネ**は幻で知らされていました。
- ⇒「**獣の死**」と「**獣の生き返り**」は、**主イエス様の死と復活**を思い起こさせます。
- ⇒「**残虐皇帝ネロ**」は、紀元68年に死んでいますので、「**今はいない**」のです、併し、「**残虐皇帝ネロ**」の再来と言われる「**ドミティアヌス皇帝(81～96)**」が、再び、皇帝礼拝を強要したと言われ、「**奈落(の底)から上って来る**」と、これも、**陰府まで下られた主イエス様の復活**を連想させています。
- ⇒併し、決定的な相異は、「**獣**」が「**(時期が来ると再び永遠の)滅亡に(落ち)行く**」ことです。
- ⇒「**今もいます主**」、「**その名を主の生命の書に記されている者**」は、「**一時的権力や栄華**」を取り戻す「**獣の滅び**」ではなく、「**永遠の命**」へと導かれるので、そこに**慰め**があります。
- ⇒**OS師**は、日本の政治や文化にも触れ、**偶像礼拝、人間礼拝の毒風**が**蔓延したネロの時代**を連想しておられます(397頁。)

◆ マタイ25章14～30節 ; 主イエス様は、天の御国を説明の時、しもべに託したタラントの譬話をされました。

◇ 25:14～30 ; 塚本訳 ◆ 天の国—タラントの譬

「14 (ほんとうに目を覚ましておれ。人の子が来る時、)天の国は、旅行に出かける人が僕たちを呼んで財産を預けるようなものであるから。

15 それぞれの力に応じて、一人には五タラント〔千五百万円〕、一人には二タラント〔六百万円〕、一人には一タラント〔三百万円〕を渡して旅行に出かけた。

16 五タラントあずかった者はさっそく行ってそれを働かせ、ほかに五タラントもうけた。

17 同じように、二タラントの者もほかに二タラントもうけた。

18 しかし一タラントあずかった者は、行って地を掘り、主人の金を隠しておいた。

19 かなり日がたってから主人がかえって来て、僕たちと貸し借りを清算した。

- 20 まず五タラントあずかった者が進み出て、ほかの五タラントを差し出して言った、『御主人、五タラント預りましたが、御覧ください、ほかに五タラントをもうけました。』
- 21 主人が言った、『感心々々、忠実な善い僕よ、少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一しよに喜んでくれ。』
- 22 ニタラントの者も進み出て言った、『御主人、ニタラント預りましたが、御覧ください、ほかにニタラントもうけました。』
- 23 主人が言った、『感心々々、忠実な善い僕よ、少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一しよに喜んでくれ。』
- 24 最後に一タラントあずかっていた者も進み出て言った、『御主人、あなたは(種を)まかない所で刈り取り、(金を)まき散らさない所で集める、きつい方と知っていたので、
- 25 (商売をするのが)恐ろしく、行って、あなたのタラントを地の中に隠しておきました。そら、お返しします。』
- 26 主人が答えた、『怠け者の、悪い僕よ、わたしがまかない所で刈り取り、まき散らさない所で

集めることを知っていたのか。

27 それなら、わたしの金を銀行に入れておくべきであった。そうすればかえって来たとき、(元金に)利子をつけてもどしてもらえたのに。

28 では、その一タラントをその男から取り上げて。十タラント持っている者に渡しなさい。

29 だれでも持っている人は(さらに)与えられてあり余るが、持たぬ人は、持っているものまでも取り上げられるのである。

30 さあ、この役に立たない僕を外の真暗闇に放り出せ。そこでわめき、歯ぎしりするであろう。』と、主イエス様は、タラントの譬を通して、**獣神の恵み**に対する**信仰の態度**が問われず、**神の恵み**に気づくことが大切であると、**エステル書4章の大逆転劇**を解き明しつつ、EY師が旧約一日一章に記しておられます。

◇14～30節；主イエス様は、**神の御国**を語る時、「**タラントの譬**」で「**五タラント**」、「**二タラント**」を与った者は、「**神の恵み**」に気づき、「**一タラント**」与った者は、「**神の恵み**」に気づかなかったことを語っておられます。

- ⇒「**一タラント**」は、決して少ない額ではなく、**神のしもべ**が何を期待されているかが大事で、**神の御国**は、「**神とともに生きる生活**」であることを再確認させていただきたいと願います。
- ⇒「**神の恵みの奥義**」は、「**神の愛の恵み**」に与る人々に、「**信仰、希望、愛**」をもって、「**神の永遠のいのち**」の中に生かすためのものです。
- ⇒これに対して、「**獣の奥義**」は、「**獣の回復**」という驚くべき姿を見せることで、人々に**獣の権力・魅力**を感じさせ、感動さえも与えますが、その先には、「**獣の滅亡**」が、用意されているというのです。
- ⇒**OS師**は、日本政府が、「**神道**」を公認宗教にすることで、戦争を戦って来たように、今また、「**神道**」を宗教ではなく、日本人の慣習であると宣伝しつつ、多くの国民を自分たちの支配下に置こうとしていると指摘しています。
- ⇒これは、**ヨーロッパ**においても、同様に、**R. B**は、「**神政政治**」をローマ・カトリック教会が行い、当時の**教皇**が、**皇帝の座**を占め、**5～15世紀の中世時代**を支配したと記す。

- ⇒**マルチン・ルター**は、「**宗教改革**」によって、**5世紀以前の時代への回復**、「**神の恵み**」を語った**アウグスチヌスの神信仰**へ回帰を求めたのだとも、「**R. B**」は、「**宗教改革史**」に記しています。
- ⇒「**免罪符**」事件も、当時の教会が、政治や文化を支配していたため、財源を確保する必要に迫られた結果でもあったのです。
- ⇒**マルチン・ルター**は、その時代の教会の実体をよく知っており、「**神信仰、神の恵み、祭司**」の大切さを語ったのです。教会が、国家と宗教の間を繋ぐ祭司ではなく、「**神の祭司**」、「**神のしもべ**」として、「**神に仕え**」、神礼拝することの本務を取り戻すことを求めたのです。
- ⇒「**贖宥の効力を明らかにするための討論**」として、95提題を提示の時、**マルチン・ルター**は、第1項で、「**私たちの主であり師であるイエス・キリストが、「悔い改めなさい…」(マタイ4:17) 神と言われたとき、彼は信じる者の全生涯が悔い改めであることをお望みになったのである。**」と、書いているのです。
- ⇒**自分の罪の認知と告白が、求められています。**

結論；

- ◇神は、変わらない愛と思いやりの神です。
- ◇ヨハネの黙示録は、1章1節、「イエス・キリストの黙示」で、神の御子イエス・キリスト様が、天使を通し(1)、長老・使徒ヨハネに与えた「神の国到来の奥義」の黙示で、ローマ皇帝ドミティアヌス(81～96)時代に記録と理解。
- ◇ヨハネ黙示録1章は、御子の再臨信仰と愛、2章～3章は、7つの教会への手紙、4～5章は、羔羊礼拝と大讚美、6～13章は、聖徒の戦い、天使と龍(悪魔・サタン)、獣との戦い、14章は、小羊への大讚美、神無視の人々への裁きと信仰者への忍耐の求め、15章は、金の怒りの鉢による神の裁き序曲、16章は、金の鉢の用意命令、腫物、血海、血水、太陽炎焼、獣の座の暗黒による裁き、ハルマゲドンでの龍(悪魔・サタン)、第1、第2の獣と主なる神との最終決戦、バビロンの滅亡預言で、1～6節aは、大淫婦・バビロンの神なき生活と地の権力者との結びつきです。
- ◇ヨハネの黙示録17章6b～8節も、大淫婦が乗る獣の奥義の天使による説き明しです。

- ⇒ヨハネの黙示録17:6b~8は、「**獣の奥義**」の説き明しでした。
- ⇒**龍(悪魔・サタン)**と**獣**と**大淫婦**は、「**神なき生活**」確保が、使命の者たちで、「**獣の奥義**」は、彼らの**政治的文化的支配権**を固持することのわざの結集です。
- ⇒彼らなりの奇蹟を行うこともでき、人々を魅惑する財政力、文化を先導する華美な演出力も備えています。
- ⇒併し、天使が、ヨハネに啓示してくれましたように、「**龍(悪魔・サタン)**、**獣**、**大淫婦**」たちの目的は、「**反キリスト勢力**」の結集です。
- ⇒「**偽宗教、偽預言**」は、自分たちの目的達成の手段です。「**龍(悪魔・サタン)**」は、荒野で「**主イエス様**」を誘惑したほど、あらゆる人々を**神信頼**から**反キリスト**へ誘っています。
- ⇒学校教育、地域活動、慣習を利用した宗教行事の復活など、さまざまな出来事に侵入してきています。
- ⇒「**神の福音**」を宣べ伝えるのが、困難な時代ですが、「**神の恵みの賜物・タラント**」は、例外なく、ひとりひとりに与えられています。